様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２８５２

研究課題名（和文）伝統的心性の自覚から異文化コーディネーターとしての成長を促す英語教育法研究

研究課題名（英文）A sociological and linguistic approach to teaching English to Japanese students through realizing specific 'rebuilt traditions' in modern English-speaking societies

研究代表者
遠山　菊夫（Toyama, Kikuo）

杏林大学・外国語学部・教授

研究者番号：８０２６５７７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：適切な話し方を支える原理は、近代語とそれ以前では大きく異なり、他者に対する言語的配慮（Brown and Levinson）を、必ずしも普遍的概念とは出来ないとの結論を得た。彼らの言う、この「ポライトネス」とは、近現代社会特有の「作り直された伝統」の言語的反映に、その文化的差異と称されるものは、資本主義と国民国家の結び付きに関する「文明化」の度合の変異の結果に他ならない。凝縮性・平等性・連帯性を特徴とする共同体的戦士社会の言語の「礼に適った話し方」は、封建社会の登場と進展に伴い、身分制騎士社会の社交に特化した全く新しい言語装置に取って代わられた。これこそが、「ポライトネス」の源流である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近現代社会の形成に際して、話し手の意識に組み込まれた「作り直された伝統」的心性こそが、「適切な話し方」ばかりでなく、「好まれる談話展開パターン」、ジャンルやトピックに固有の「好まれる表現方法」や「言及されることが期待されている情報」の選択の主要因であるとの分析に立脚し、この心性を意識させることで、スピーチ、スモールトーク、ディベートなどのスピーキング指導において日本人英語学習者の苦手を克服させる授業への応用が期待できる。また、様々なジャンルの英文からスキーマを抽出し活用するライティング指導、文法的機能を小説言語の文体装置として読み解くリーディング指導など、他の英語教育の領域でも発展させ得る。

研究成果の概要（英文）：Our research strongly suggests that the principles of proper verbal behavior in modern society has developed as a result of ‘rebuilt traditions’ in modernity as opposed to those in premodern society. This means that it is difficult to assume the existence of timeless and universal criteria for language propriety, and that Brown and Levinson’s politeness theory is a valid tool only for analyzing polite conversation in modern languages. The politeness theory is rather useful because of mentioning diverse cultural differences in language usage showing good manners. A great diversity of language propriety in modernity is nothing but a manifestation of difference in recreation of tradition among various modern societies. Speakers influenced by specific ‘rebuild traditions’ cannot easily understand quite different polite usage of a different modern language. It is significant for a Japanese speaker studying English to realize ‘rebuild traditions’ in modern English-speaking societies.

研究分野：社会学的言語研究（コミュニケーション学）

キーワード：社会学理論　言語学理論　コミュニケーション　英語教育　英語史　近代語とそれ以前の言語　言語と文化　言語と文明

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

言語学理論を支えとする語用論研究のあり方、とりわけ歴史語用論研究は、社会構造の変化とそれに伴う話し手の意識の変容を分析の射程に入れないために、歴史社会学研究の立場からすると極めて納得のゆかぬ形で展開されている。本課題は、研究代表者が、言語学と歴史学を専攻する研究分担者の協力を得て、社会学理論を応用して英語史を捉え直そうとする社会学的言語研究の新たな挑戦であり、その成果を我が国の英語教育に応用しようとする試みである。

２．研究の目的

申請時における当初の研究目的は以下の通りである。他者に対する適切な振る舞い方という観点から、誤解や困惑を生まない対人コミュニケーションのあり方を研究し、異文化教育としての英語学習の場に応用する方法を提案する。そのために、まず、交渉、社交、儀式、教育やビジネスの現場、合意形成プロセスなどの状況を設定し、文化接触と文化受容の諸相を分析し、相互作用を通じて当事者にもコミュニケーションそのものにも変化が生じる動的プロセスの構造を詳らかにし、その成果を基盤として、異文化接触時における摩擦係数を極小化するための英語教材および授業の開発を目指す。すなわち、日本人学生と外国人留学生が相互的ピアサポートを通じて、生活環境の表面的な均質化によって見え難くなっている伝統的心性の自覚から「異文化コーディネーター」としての成長を促す新しい英語教育法の提案である。

３．研究の方法

コミュニケーション行動を取る人の伝統的心性が、そのコミュニケーションのあり方に与える影響についての基礎研究を行う。 その際に、人が他者と場を共にする「共在」に関する原理を解き明かすことで、「コミュニケーション」という形で人間が行っている行為の本質を突き止め、そこに伝統的心性がどのように係わっているのかを明確に示してゆく。具体的には、１）時代に応じて変遷を重ねてきた「礼に適った巧みな話し方」の考察、２）諸言語によって異なる「ディスコースレベルの好まれる構造・話題」の考察、３）異文化交流を通じて互いを尊重し合うコミュニケーションのあり方を模索してきた歴史の考察を並行して行った上で、「ポライトネス」という概念だけではカバーしきれない配慮表現に関する歴史語用論研究を社会学理論の観点から批判的に検証した上で、伝統的心性がコミュニケーションのあり方に与える影響について一定の結論を得る。その成果は、研究グループ各メンバーが所属する国内外の学会における口頭発表や論文発表、勤務校の紀要論文発表の形で逐次公にしながら、社会学理論および言語学理論に止まらず、比較文化論的、歴史学的考察に立脚した学融合的な意見交換を重ねた上で、伝統的心性がコミュニケーションのあり方に与える影響をテーマとした学術的研究書の公刊に備える。

さらに、この基礎研究の成果に基づき、研究グループメンバーがそれぞれの担当英語授業において実験を繰り返し、実験成果について討議を行い、そのフィードバックを授業に反映する応用研究を展開する。そのために、各授業の履修学生との間でインタラクティブな PBL 形式の授業を通じて、現代の表面的な均質化された生活様式の背後に、各履修学生の文化的背景に由来する伝

統的心性が隠れていることを自覚してもらい、日本人学生と外国人留学生の各人の間に意識のギャップがあることを確かめ、そのギャップを埋めてゆく作業を、学生が英語を使って展開できるようにファシリテイトしてゆく。これにより、話者の異文化が英語の話題の選択に与える影響を極小化する具体的方法の案出を目指し、最終的には、コミュニケーションの当事者が自他の伝統的心性について自覚から「異文化コーディネーター」としての成長を促す新しい英語教育法の確立を目指す。その成果は、ホームページ上での情報公開を通じて発表してゆく。

４．研究の成果

（１）2016 年度の研究成果　伝統的心性がコミュニケーションのあり方に与える影響についての基礎研究、伝統的心性についての自覚を通じて「異文化コーディネーター」として成長させる応用研究、それぞれの 2016 年度の研究成果は以下の通りである。基礎研究の中心課題を成す、様々な時代の英語資料における社交、儀礼など様々な状況の相互行為の言語的・非言語的特徴についての言語学的・社会学的分析として、遠山は、古英語・中英語資料に焦点を絞り、Anthony Giddens が「伝統」と結び付けた「真理の定式化した観念」の言語的表徴とは「格言的表現」に他ならず、その歴史的変化は食事や衣装に係る作法の変容と並行関係を成すことを、学会発表を通じて明らかにした。同時に、「伝統社会」のこうしたコミュニケーション様式の、「ポスト伝統社会」における継承・変容　・消滅・復活の可能性について招待講演において触れた。倉林は、基礎研究と応用研究を結び付けつけるための準備として必要不可欠な分析を幅広く行った。基礎研究に関しては、文化とスタイルの英語らしさ、小説言語の分析、応用研究に関しては、英語教育と英語文学教育の接点という、それぞれのテーマに関して精力的に学会発表と論文によって深めた。八木橋は、応用研究のうち「話者の異文化が英語の話題の選択に与える影響を極小化する具体的方法の案出」を目指し、日英語の論理構造の違いに焦点を当て所属学会のワークショップで研究発表を行い、その成果を共著論文筆頭者として纏め、同時にこの分野の基礎的研究も進めた。楠家は、基礎研究として、幕末期から明治初期の日英間の外交文書の分析による互いを尊重し合うコミュニケーションのあり方の模索の歴史に関する今日的な再評価に関して、英国における日本観の変遷と現状について現地調査を行いながら、招待講演や論文を経て、単著の『幕末の言語革命』として纏めた。

（２）2017 年度の研究成果　伝統的心性がコミュニケーションのあり方に与える影響についての基礎研究、伝統的心性についての自覚を通じて「異文化コーディネーター」として成長させる応用研究、それぞれの 2017 年度の研究成果は以下の通りである。基礎研究の中心課題を成す、様々な時代の英語資料における社交、儀式など様々な状況下の相互行為の言語的・非言語的特徴についての言語学的・社会学的分析として、遠山は、中英語資料に焦点を絞り、当時のある種の特徴的な会話の様式を「遊びとしての論争」として捉え、そのスタイルマーカーの検証を、学会発表を通じて行った。その際、この会話の様式こそが、Georg Simmel の言う「歓談」に相当すると指摘した。倉林は、基礎研究と応用研究を結び付けつけるための準備として必要不可欠な分析を幅広く行った。基礎研究に関しては小説言語の分析、応用的研究に関しては英語文学教育と

英語教育との接点、というそれぞれのテーマに関して、精力的に学会発表と論文によって深めた。八木橋は、応用研究のうち「話者の異文化が英語の話題の選択に与える影響を極小化する具体的方法の案出」を目指し、2016 年度に続き、日英語の論理構造の違いに焦点を当て所属学会のワークショップで研究発表を行い、その成果を共著論文筆頭者として纏め、同時に、この分野の基礎研究も進めた。また、「ことわざらしさ」、文の冗長性、話し手の性差という観点からも、このテーマについての考察を深め、学会発表および論文によって成果を公開した。楠家は、基礎研究として、幕末期から明治初期の日英間の外交文書の分析による互いを尊重し合うコミュニケーションのあり方の模索の歴史に関する今日的な再評価に関して、近代日本研究に関する 19・20 世紀英国における進展に関する論考を、学会発表や論文を通じて形にした上で、単著の『ジャパノロジーことはじめ』として纏めた。

（３）2018 年度の研究成果　伝統的心性がコミュニケーションのあり方に与える影響についての基礎研究、伝統的心性についての自覚を通じて「異文化コーディネーター」として成長させる応用研究、それぞれの 2018 年度の研究成果は以下の通りである。基礎研究の中心課題を成す、様々な時代の英語資料における社交、儀式など様々な状況下の相互行為の言語的・非言語的特徴についての言語学的・社会学的分析として、遠山は、古中英語のうち、特に物語詩の戦闘場面の描写に注目し、我が国の鎌倉期・室町期の軍記物語の場合との対照を通じて、戦闘開始直前に行われる 一種の儀式もしくは儀礼としての論争である「言葉による決闘」を、Norbert Elias の文明化論に立脚して分析し、ポライトネスのストラテジーは戦士社会の構造的変化に伴い確立したと見ることが出来ると、国際学会における英語発表で示した。倉林は、昨年度に引き続き、基礎研究と応用研究を結び付けつけるための準備として必要不可欠な分析を幅広く行った。基礎研究に関しては小説言語の分析、応用研究に関しては英語文学教育と英語教育との接点、というそれぞれのテーマに関して、精力的に学会発表と論文によって深めた。また、この関連から日本語教育の授業における媒介語としての英語使用に関しても、学会発表および論文によって成果を積み重ねた。八木橋は、2016・2017 年度の成果に基づき、応用研究のうち「話者の異文化が英語の話題の選択に与える影響を極小化する具体的方法の案出」を目指し、特に、日英語の好まれる談話展開の違いに焦点を当て分析し、その成果を英語ライティング指導においてテンプレートに応用できることを論文に纏めた。また、「ことわざらしさ」の分析、子供やアスリートのコミュニケーションに特化した社会言語学的研究を通じても、学会発表および論文によって、このテーマについての考察を深めた。

（４）2019 年度の研究成果　伝統的心性がコミュニケーションのあり方に与える影響についての基礎研究、伝統的心性についての自覚を通じて「異文化コーディネーター」として成長させる応用研究、それぞれの 2019 年度の研究成果は以下の通りである。伝統的心性がコミュニケーションのあり方に与える影響についての社会学的観点から基礎研究を進めてきた遠山は、これまでの成果をまとめる形で、話題の選択とその展開の方法には、言語間・文化間の差を超えて、近代語とそれ以前の言語の間にこそ本質的な相違があるとの一定の結論を得た（その成果は、今後論文及び著作の形で発表予定）。この考え方に基づき、英語四技能の包括的向上を目指す担当基

礎科目を実践の場として、スピーチ指導を通じて、現代英語らしい話題展開の方法を履修生に浸透・徹底させる応用研究についても一定の成果を収めた（近々ウエッブサイト上において公開予定）。倉林は、「文体と文法の接点」という軸に沿って、2016・2017・2018 年度の成果を包括する形で、基礎研究と応用研究を結び付けつけ、本研究の最終的着地点の明確化を目指し、結論の提示の準備を行った。八木橋は、これまでの成果の延長線上で、基礎研究については、学会発表および論文、著作の分担執筆を通じて、様々なジャンルの英文からスキーマを抽出（＝テンプレート化）し、1)「好まれる談話展開パターン」をできる限り一般化すること、2) ジャンル・トピックに特有の「好まれる表現方法」「言及されることが期待されている情報」を抽出すること、を行った。これにより、日本語と英語に内在されていると想定される「文化的基盤の相違」を浮き彫りにすることができた。また、この成果を英語ライティング指導に活用することで、応用研究のうち「話者の異文化が英語の話題の選択に与える影響を極小化する具体的方法の案出」にさらに一歩近づくことができた。

（５）本課題の基礎研究領域での新知見　他者に対する適切な振る舞い方という観点から、様々な時代の英語資料に見られる言語的相互行為について、Georg Simmel、Émile Durkheim、Norbert Elias、Erving Goffman、Pierre Bourdieu および Anthony Giddens の社会学理論を応用して詳細な分析を行った結果、近現代社会における他者との「共在の原理」を支えるものは、資本主義と国民国家の結び付きによって生み出された「作り直された伝統」であり、この言語的具現化こそが Brown and Levinson の言う「ポライトネス」に他ならず、これを他者への言語的配慮として時代を超えた普遍的概念としては認められないとの結論を得た。むしろ、「正真正銘の伝統」が確固たる形で存在する前近代社会においては、儀礼化された侮辱と謙遜および格言的表現という、「ポライトネス」の諸戦略とは全く異なる言語的要素が「礼に適った巧みな話し方」を担保するものであったのだ。これは、凝縮性・平等性・連帯性を特徴とする共同体的戦士社会の構造を反映したものであり、その典型的会話様式が古英語期に見られる「悪舌合戦 *flyting*」という独特の論争の形態だとみなすことが出来る。これが、大封建領主の宮廷が形成される 14 世紀後半に至ると、同じ論争という形は取っていながらも、身分制社会の社交形式の言語装置の一環として、騎士と貴婦人の間の「恋の戯れの言葉の応酬 *daliance*」という全く新しい会話様式が形成される。その中核を成すものこそ、やがて「ポライトネス」として形を整えることとなる他者への言語配慮の諸形式が全く新たな姿で登場したものである。この「恋の戯れの言葉の応酬 *daliance*」は、貴族層の言語使用が市民層のそれと拮抗する形で近代英語として確立してくると、17 世紀後半の王政復古期には「機知合戦 *repartee*」という会話様式を、その継承者として見出すことになる。現代英語に見られる「軽い雑談 *small talk*」とは、中世騎士社会および近代貴族社会の社交会話様式を材料に「作り直された伝統」として現代市民社会に再構築されたものだと捉えることが出来る。「軽い雑談 *small talk*」という会話様式は、その存在自体が「ポライトネス」を言語行為化したものであり、当然ながら、その言語的特徴の分析には、Brown and Levinson のポライトネス理論は極めて有用である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　17件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 八木橋宏勇・宮﨑太樹	４．巻 7
２．論文標題 オーラルアプローチを用いた英語授業―公立中学校における４技能の育成を目指して―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 杏林大学教職課程年報	６．最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 嵐 洋子、倉林 秀男、阿部 新、田川 恭識、ジョージ アダムス、ワー 由紀	４．巻 36
２．論文標題 日本語教育における媒介語としての英語使用	５．発行年 2019年
３．雑誌名 杏林大学研究報告	６．最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yasuhiko Tomita・Hirotoshi Yagihashi・Setsuko Eto・Masae Kato	４．巻 36
２．論文標題 Constructing Systems of Community Involvement through Children’s Community Spaces	５．発行年 2019年
３．雑誌名 杏林大学研究報告	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 八木橋宏勇	４．巻 31
２．論文標題 英語ライティング指導におけるテンプレートの活用―日英語の好まれる談話展開とその内在化―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 杏林大学外国語学部紀要	６．最初と最後の頁 197-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 倉林秀男	4．巻 6
2．論文標題 日本に於ける公共サインの問題点：日本語のサインスタイルと英語のサインスタイルを巡って	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『Encounters 』獨協大学外国語学部交流文化学科	6．最初と最後の頁 83-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 八木橋宏勇	4．巻 8
2．論文標題 〈ことわざらしさ〉と新奇性	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『ことわざ』ことわざ学会	6．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 八木橋宏勇	4．巻 49－1
2．論文標題 言語学は女性と男性をどう見てきたか―ダイバーシティ推進に切り込むコミュニケーション論―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『杏林医学会雑誌』杏林医学会	6．最初と最後の頁 43-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 楠家重敏	4．巻 30
2．論文標題 サトウの英文論説と『英国策論』	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『杏林大学外国語学部紀要』	6．最初と最後の頁 11－37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 倉林秀男	4．巻 4
2．論文標題 言語教育と文学教育の融合の可能性：認知文法的観点からの読解の例を通して	5．発行年 2016年
3．雑誌名 『Encounters』（獨協大学外国語学部交流文化学科）	6．最初と最後の頁 83-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 倉林秀男	4．巻 1
2．論文標題 英語教員養成に於ける意義のある文学教育とは	5．発行年 2016年
3．雑誌名 『教職研究』（桜美林大学）	6．最初と最後の頁 57-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 倉林秀男	4．巻 11
2．論文標題 英語科指導法に接続可能なアクティブ・ラーニングを取り入れた文学教育の可能性	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『教職課程年報』（桜美林大学）	6．最初と最後の頁 142-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 倉林秀男	4．巻 3
2．論文標題 コア・カリキュラムを見据えた英語科教育法のコースデザインのための現状分析	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『教職課程年報』（杏林大学）	6．最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 倉林秀男	4．巻 5
2．論文標題 文化とスタイルの英語らしさ	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『Encounters』（獨協大学外国語学部交流文化学科）	6．最初と最後の頁 129-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 八木橋宏勇・植野貴志子・多々良直弘・野村佑子・長谷川明香・工藤貴恵	4．巻 34
2．論文標題 日英談話対照研究に基づく英語ライティング用教材の開発	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『杏林大学研究報告―教養部門―』	6．最初と最後の頁 97-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 楠家重敏	4．巻 49
2．論文標題 イギリス公使館の通訳見習制度	5．発行年 2016年
3．雑誌名 『英学史研究』（日本英学史学会）	6．最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 楠家重敏	4．巻 29
2．論文標題 ＜年譜＞幕末在日外国人の日本研究史（1853年~1858年）	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『杏林大学外国語学部紀要』	6．最初と最後の頁 133-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 楠家重敏	4．巻 63
2．論文標題 特別講演　幕末の言語革命	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『文体論研究』（日本文体論学会）	6．最初と最後の頁 71-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計34件（うち招待講演　3件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 倉林秀男
2．発表標題 文体を考える：公共サインのスタイルについて
3．学会等名 日本文体論学会第115回大会（シンポジウム）
4．発表年 2019年

1．発表者名 八木橋宏勇
2．発表標題 メディアとことわざ
3．学会等名 ことわざフォーラム2019（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 八木橋宏勇
2．発表標題 聖書の対照研究
3．学会等名 第44回社会言語科学会研究大会（ワークショップ「社会言語科学における対照研究の可能性」 ）
4．発表年 2020年

１．発表者名 Kikuo Toyama
２．発表標題 Physical and Psychological Distance in Warrior Society: Warfare, Courtesy and Verbal Dueling in Medieval English and Japanese Narrative
３．学会等名 International Sociological Association XIX World Congress of Sociology（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hideo Kurabayashi
２．発表標題 Investigating Hemingway’s Apprenticeship: Has his Prose Style been Established from his High School Days?
３．学会等名 XVIII International Hemingway Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 倉林秀男
２．発表標題 教室の中のアメリカ文学：翻訳を積極的に使うことで日本語と英語の差異を意識させる
３．学会等名 日本アメリカ文学会第57回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 嵐洋子、倉林秀男、田川恭識
２．発表標題 入門・初級の日本語授業における媒介語としての英語使用の実態－授業動画の分析を通して－
３．学会等名 日本語教育方法研究学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 八木橋宏勇
２．発表標題 〈ことわざらしさ〉と新奇性―定型と逸脱のレトリック―
３．学会等名 ことわざ学会2019年3月例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 八木橋宏勇
２．発表標題 選手間コミュニケーションの対照研究―試合中の戦術決定はいかになされているか―
３．学会等名 社会言語科学会第43回大会公開シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 遠山菊夫
２．発表標題 中世騎士社会に登場した社交のための新時代の「スタイル』」　－中英語頭韻詩に見られる「論争形式の歓談（daliaunce）」と他種の会話様式－
３．学会等名 第40回社会言語科学会研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 倉林秀男
２．発表標題 初等・中等教育におけるアクティブ・ラーニングの現状
３．学会等名 日本観光ホスピタリティ教育学会2017年度 第１回 研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 倉林秀男
２．発表標題 英語教育と文学教育のはざまで
３．学会等名 日本英文学会関東支部第14回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 倉林秀男
２．発表標題 公共サインの客観的評価のための試み ―英訳にあらわれた「ズレ」からそれを探る―
３．学会等名 第40回社会言語科学会研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 倉林秀男
２．発表標題 This Side of Paradise精読
３．学会等名 日本F．スコット・フィッツジェラルド協会2017年度第2回東京研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 倉林秀男
２．発表標題 日本における英語が付された公共サインのスタイルの問題点 ―日本と諸外国の公共サインを比較して―
３．学会等名 日本文体論学会第112回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 倉林秀男
２．発表標題 ハイスクール時代の作品から見るErnest Hemingwayの文体形成
３．学会等名 日本アメリカ文学会第56回全国大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 倉林秀男
２．発表標題 アメリカ文学作品を英語の教室でいかに扱うか―The Great Gatsbyの場合
３．学会等名 日本アメリカ文学会第56回全国大会ワークショップ
４．発表年 2017年

１．発表者名 八木橋宏勇
２．発表標題 冗長性の文体的要因―母語話者の内省とコーパスデータではなぜ容認度判断に乖離が生じるのか―
３．学会等名 日本文体論学会第111回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 八木橋宏勇・多々良直弘ほか
２．発表標題 日英語の論理的表現方法と学習者の理解度
３．学会等名 日本英語学会第35回大会ワークショップ第1室
４．発表年 2017年

１．発表者名 楠家重敏
２．発表標題 小山騰氏『ケンブリッジ大学と近代日本研究の歩み』を読む
３．学会等名 日本英学史学会第515回例会
４．発表年 2017年

１．発表者名 楠家重敏
２．発表標題 W．G．Astonの「ことわざ」紹介
３．学会等名 ことわざ学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 楠家重敏
２．発表標題 1858年の修好通商条約―回顧と展望
３．学会等名 日本英学史学会・日本仏学史学会共同例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 遠山菊夫
２．発表標題 ‘Flyting’に見られるアイロニーの仕掛け―『ベーオウルフ』および『ガウェイン卿と緑の騎士』における「反語信号」の解読
３．学会等名 日本文体論学会第109回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 遠山菊夫
２．発表標題 中世イングランドにおける祝宴や食卓の行儀作法―ノルベルト・エリアスの文明化論から『礼節cortaysy』と『習わしcynn』を考える―
３．学会等名 日本社会学会第89回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 遠山菊夫
２．発表標題 古英詩の‘flyting’に関する語用論的研究―控えめな表現と格言的表現の使用と機能―
３．学会等名 日本語用論学会第19回（2016）年度大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 遠山　菊夫
２．発表標題 遊びとしての会話
３．学会等名 東京経済大学2016年度後期特別企画講義『仕事、レジャー、そしてライフスタイル』第五回（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 倉林秀男
２．発表標題 Hemingway’s Acquisition of Prose Style
３．学会等名 The XVIIth Biennial International Ernest Hemingway Conference（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 倉林秀男
２．発表標題 英語らしさと＜相同性＞　文化と表現・スタイルについて考える
３．学会等名 日本文体論学会第110回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 倉林秀男
２．発表標題 「フィッツジェラルドの英語」研究序章
３．学会等名 日本F.スコット・フィッツジェラルド協会2017年第1回東京研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 八木橋宏勇
２．発表標題 ことばで挑む防災・減災・復興
３．学会等名 日本文体論学会第109回大会研究フォーラム『災害と文体―災害社会学・言語学の観点から防災・減災・復興を考える―』
４．発表年 2016年

１．発表者名 八木橋宏勇
２．発表標題 論理表現に注目した日英比較
３．学会等名 第38回社会言語科学会研究大会ワークショップ第6室『英語教育・国語教育と論理的思考―日英語比較、および過去 30 年間の国立大学入試問題分析からみる、新指導要領への提言―』
４．発表年 2016年

１．発表者名 八木橋宏勇
２．発表標題 ライティング答案に現れる英語と日本語の論理
３．学会等名 日本英語学会第34回大会ワークショップ第2室『英語指導要領の実施とその教育効果測定』
４．発表年 2016年

１．発表者名 八木橋宏勇
２．発表標題 談話と言語単位の慣習化―"the reason is because"を事例として―
３．学会等名 成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究―英語・日本語・アジア諸語を中心として」
４．発表年 2016年

１．発表者名 楠家重敏
２．発表標題 幕末の言語革命
３．学会等名 日本文体論学会第109回大会（招待講演）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計6件

１．著者名 八木橋宏勇	４．発行年 2019年
２．出版社 朝倉書店	５．総ページ数 864
３．書名 『認知言語学大事典』の「定型連鎖」「メンタル・コーパス」「サピア=ウォーフの仮説」のコラムの項目	

１．著者名 八木橋宏勇	４．発行年 2019年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 376
３．書名 『認知言語学を紡ぐ』（成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書）「母語話者の内省とコーパスデータで乖離する容認度判断－the reason...is because...パターンが妥当と判断されるとき－」（pp．71-89）	

１．著者名 八木橋宏勇	４．発行年 2020年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 448
３．書名 『ことばから心へ－認知の深淵－（吉村公宏教授退職記念論文集）』「試合中に戦術を決める選手間コミュニケーションの対照研究」（pp．53-63）	

１．著者名 倉林秀男	４．発行年 2018年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 237
３．書名 言語学から文学作品を見る-ヘミングウェイの文体に迫る	

１．著者名 楠家重敏	４．発行年 2017年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 290
３．書名 ジャパノロジーことはじめ－日本アジア協会の研究	

１．著者名 楠家重敏	４．発行年 2017年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 ２１４
３．書名 『幕末の言語革命』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	倉林　秀男 (Kurabayashi Hideo) (00407066)	杏林大学・外国語学部・准教授 (32610)	
研究分担者	八木橋　宏勇 (Yagihashi Hirotoshi) (40453526)	杏林大学・外国語学部・准教授 (32610)	
研究分担者	楠家　重敏 (Kusuya Shigetoshi) (40139069)	杏林大学・外国語学部・教授 (32610)	